

園番号 610

令和2年度 奈良市立明治幼稚園 研究実践概要

園長名 尾北 亜紀
全園児数 19名

1. 研究主題 豊かな心をもち 生き生きと活動する幼児の育成
～身近な環境との関わりを通して～

2. 研究年度 3年度

3. 研究主題設定理由

少子化や核家族化が進み、生活経験や人との関わりに個人差が大きい。様々な「ひと・もの・こと」との関わりを通して遊びや生活を広げ、人と関わる喜びや思いやりの気持ちを育てていくと共に、意欲的に活動する子どもを育成していきたいと考え主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

① 研究のねらい

- ・子どもを取り巻く様々な環境と関わる中で、感動体験を積み重ね、心豊かに生き生きと生活しようとする力を育てる。
- ・発達の見通しをもち、家庭・地域・小学校との関係を密にしながら子どもたちが主体的に関わり、豊かな心を培いたくましく意欲的に活動するために必要な環境構成や保育者の援助の在り方を探る。

② 研究の重点

- ・研究主題についての共通理解を深め、日々の保育の中で実践する。
- ・子ども一人一人が意欲的に行動し楽しめるような環境や保育内容の創造に努める。
- ・豊かな感動体験や地域の人材育成を通して、人間形成の基礎となる生活態度や心情を育む。
- ・各保育教育士が研究主題から課題をもち、園内研究会などに積極的に参加し、力量を高める。
- ・小学校との交流の場を広げるとともに、それぞれの教育について相互理解を図る。

③活動の方法 援助と環境構成の工夫 生き生きと活動していると思われる箇所

【事例1】 『噴水みたいにしたい』 5歳児 7月

- 形の大きさや違う用具を使い、水の量や注ぎ方を工夫しながら、噴水づくりを楽しむ。
- 自分の考えたことを友達に話したり、友達の話の聞いたりして遊びを進める。

砂場で塩ビパイプを見つけて、砂場に立てた状態で水を入れ始める。「いっぱい入れたら、上から溢れるんじゃない？」「噴水みたいになるね」と、周りの幼児も喜び、噴水づくりが始まった。バケツやジョウロなどを使用し水を入れていたが、水道と砂場までの距離が離れていたため、すぐに水が砂に吸収され、水が溜まらない。「大きい方のバケツで入れよう」と試すが、水の勢いでパイプが倒れてしまった。「倒れたね、残念。でも、やってみたら気付けたね」と、試みた子どもの気持ちを受け止める。「やっぱり、小さい入れ物でそーっと入れないとダメかも」とお茶碗に変える。しかし、汲みに行っている間に水が乾き、溜まらない。走って汲みに行ったり、水が減っていないか見る役割合を決めたりして進めていく。

しかし、中々水が溢れるまで溜められず、イメージしている噴水のようにはならない。そこで「水を入れたバケツをここまで持ってきたらいいんじゃない？」と友達が提案する。「やってみよう」と、友達と早速試してみる。しばらくすると「やった、溜まってきた」「もう少しで溢れそう」「あと、少しだから大きなバケツで入れよう」と水を注ぐと、「わー、やった、できた」「噴水だ」と大喜びし、何度も楽しんだ。

《反省・評価》

・一人一人が思う用具を使用して水を汲み入れるが、自分たちがイメージする噴水にはならなかった。そこで、水の注ぎ方や用具を変えたり、役割分担したりしながら進めていった。子ども自らが、アイデアを出しながら「どうなるんだろう」という予測を十分に試すことができる時間をつくることや、自ら選べるように様々な用具を準備しておくことが、いろいろな方法を繰り返し試したり、工夫したりして、生き生きと遊ぶ子どもの姿につながった。



【事例2】 『長いドングリ転がしをつくろう』 4歳児 11月

- 友達と一緒に目的をもって遊ぶ楽しさを味わう。
- 思いや考えを出し合いながら、友達と遊ぶ。

転がしコースで何度もドングリを転がし楽しんでいましたが、A児の「もっと、長いコースにしたい」という思いから、新たに段ボールを探しつなげることにした。するとコースは長くなったが、傾斜が緩やかになり転がらなくなってしまった。「何で転がらないのかな？」という声を周りにいる友達に知らせると、B児(5歳児)が「もっと、斜めにしないと転がらないよ」とアドバイスし、傾き具合を調整する。B児「下で支えないとまたコースが真っ直ぐになるよ」と、4歳児と5歳児が一緒になって支えになる段ボールを探しに行く。下まで転がるように、支えの段ボールの高さを調節し、何度も傾き具合を試す。「下まで、行った」「最後まで転がった」と大喜びし、繰り返し楽しんだ。

《反省・評価》

・A児は、友達の遊びに左右されることが多かったが、自分の思いを出し一緒に段ボールを探したり、傾斜をつける方法を工夫したり、何度もドングリを転がして遊んだり夢中になって遊ぶ姿が見られた。

・一人一人の思いを大切にしながら、より具体的に伝えたり、周りの友達に知らせたりしたことで、繰り返し楽しんだり自分の目的をもって遊んだりする姿につながった。4歳児にとっては、保育者が間に入って子どもの思いに寄り添いながら、表現しようすることを補足したり、具体的に手助けしたりすることが必要であると思われる。



【事例3】 『僕、しない。負けるのいやだ』 5歳児 11月～2月

- 体をしっかりと動かして、ボール遊びを楽しむ。
- 友達と一緒にルールを考え、遊びを進めていく。

〈11月～12月〉

一つの円を利用した転がしドッチボールを提案し、共通経験で遊ぶ。翌日より、「昨日

の、転がしドッチボールしよう」と友達を誘い、サッカー遊びの経験から、自分たちでラインカーを使用して円をかくて遊びを進めた。経験を重ねていくと、友達を目掛けてボールを転がしたり、「なかなかボールが来ないから、ボールを増やそう」と、人数によってボールを増やしたりしてルールを新たに考え、遊びを進めていく。

(1月)

転がしドッチボールをしていると、「お兄ちゃん(小学生)のドッチボールは、ボールを投げるんだって」と言いながら、友達に説明する。遊びの中で、ボールを投げて当たったら交代するルールに変更し、遊び始める。

その後、2チームに分かれてのドッチボールを、遊びの中で提案する。C児は、自分がボールを当てても、チームとして負けることもあるので「僕、しない。負けるのいやだ」と言って、参加しない日が続いたが、友達が「C君、一緒に入ってよ」という声掛けに、C児「うーん、そうか。入ろうかなあ」と、少し照れながら参加すると、入ったチームが勝って、大いに喜んだ。「C君、ドッチボール、どうだった?」、C児「楽しかった」、「そうだよ。友達が誘ってくれて良かったね。勝つ時もあるし、負ける時もあるんだよ」、C児「うん、分かった」と納得した様子で、それ以降も繰り返し遊んだ。

(2月)

ボールの投げ方にぎこちなさもなくなり、チームによって白帽子にすると分かりやすくなる、ボールを投げる時は勢いよく走って投げる、取ったらすぐに投げるなど、どうしたら勝てるのか考えて遊んでいた。参加人数が奇数になると、チームに分かれた時に同じ人数にならないことに気付いたC児たちは、自ら友達や保育者を誘ったり、4歳児に声を掛けたりするようになった。

《反省・評価》

・簡単なルールのある遊びを提案したことで、自分たちで遊び方やルールを考え、遊びを展開していくことができた。そのことが継続して遊ぶ姿や、自分たちで積極的に遊びを進めていく楽しさを味わうことにつながった。

・C児にとって、負ける悔しさから「したくない」という思いと、「遊びたい」という思いが入り交じり気持ちの落としどころがつかめないようだった。しかし、友達が誘ってくれたことがきっかけとなり、「負けても今度は勝つぞ」という思いをもって遊ぶようになった。

5. 研究の成果

・自分の考えや思いを様々な方法で表現できる環境、そしてそれを受け止めてくれる友達や保育者がいることは、やってみようとする意欲や、繰り返し試してみる力、継続して遊ぶことで得られる満足感などにつながり、生き生きと活動する姿に現れてくと実感した。

・発達段階やその時期の育ちに応じた、援助や環境構成をする為には、子どもと一緒に遊び、一人一人の興味や関心を丁寧に見取ることができる力量を付けていくことが大切である。

6. 今後の課題

・遊びを通して身近な環境と関わり、「ひと・もの・こと」との出会いや気づきなどで得られた直接体験やその積み重ねは、貴重な学びである。その学びが子どもたちの豊かな心の育成につながるように、引き続き子どもたちの興味や関心を丁寧に見極め、保育内容の創造や、援助、環境構成の工夫をしていく必要がある。